【史料紹介】
平岩元珍『喨囈録』

綱川　歩美

ここにあげる史料は、文化十一（一八一四）年に平岩元珍（生年未詳～文政一〈一八一八〉）によって著された『喨囈録』である。

作者の元珍は尾張藩士であり、禄高一五〇石を受ける世臣の家である。天明六（一七八六）年に家督を継ぎ、家老であった成瀬隼人正の同心に加わる。はじめ遠次郎といい、寛政五（一七九三）年には、重右衛門と名を改め、大番組に編成されている。そして、文化三（一八〇六）年から同八年までは、江戸詰の納戸役の金方を経験している。その後は書院番を勤めるので基本は番方で、藩内の階層でいえば中級に位置する最も多い階層である。

元珍は、儒学をまず、藩主侍講・須賀亮斎（享保九〈一七二四〉～文化元〈一八〇四〉）に、後に中村習斎（享保四〈一七一九〉～寛政十一〈一七九九〉）の家塾に出入りして学んだ。両者は藩の儒臣で、ともに山崎闇斎の系統である。元珍の学びも朱子学を中心とするものであったと推測できる。元珍の著作『盍徹録・盍徹録付考』は、闇斎に仮託されて広まっていた経世書『盍徹問答』に考察を付したもので、闇斎の学問に唯一言及した書物として残され、元珍はその内容を高く評価している。

一方、元珍は音楽（いわゆる「雅楽」）に対する造詣が深く、奏楽の盛んな尾張藩地域でも名前の知られた人物である[1]。その学びは、笙を京都の楽人・豊原家に入門し、当主の文秋（天明三〈一七八三〉～天保十一〈一八四〇〉）から二度に亙って秘曲を伝授されるほどであった。また、雅楽方面の著作も数多く執筆している。

さて、本史料は元珍が晩年に書き記した学芸の指南書である。文化一一年の二月、元珍は病におかされ一時は死線をさまようほどの状態であったという。原因は明らかにされていないが、「疫熱」とあるので発熱をともなう伝染性の病であったと推察される。徐々に回復する中で、筆をとり自身の学びを省みつつ、思うところを記したというのが本書である。

「喰䆀」とは寝言のことで、本書の元珍自身の序文によれば「大邦の君子」に示すようなものではないと謙遜しつつも、人の目に触れることを期待して「塾中初学の徒の警戒」として残し置くことにしたという。

本文内容は学問をめぐる現状認識が披露された後、「六芸の講し方」についてそれぞれ論じられていく。「六芸」とは、礼・楽・射・御・書・数である。「学び方」ではなく、「講じ方」であることが特徴的である。これには、元珍の学問観とその現実との齟齬が深く関わっている。即ち、本来学問は個人の修養から治国平天下の政治まで一貫した基準によって連続的に遂行されるべきであるのに、趣味的な遊芸に陥り「天下無用の物」のレッテルを貼られているという認識である。[2] 元珍は、こうした現状の根幹に幼少からの教示法の過ちがあるとし、儒学的教養の教え方に一考を述べているのである。

周礼が基本教養とする六芸は、五礼・六楽・五射・五御・六書・九数である。元珍もこの古典理解を下敷きにしているわけだが、力点はそれらの内容を説明することにはない。元珍がいうのは、何よりも現行において有用であるために古典の範をどのように活かすかという点にある。「文義」と「わさ（業）」の接合への強い意志である。

例えば、本文中に闇斎の『大和小学』について言及する部分がある。曰く、「善哉、垂加翁『大和小学』をあらはして立教明倫敬身の目ハたてられたれと、其のする所の説のこらす合りともおもはれす。今一種の大和小学ハ本書をかなに取直したるのみにして変通なし」。『小学』の「日本版」である闇斎の『大和小学』は、内容のすべてがもとの内容を引き継いでいるわけではないという点が、元珍にとっては重要である。もう一種類の『大和小学』とは、おそらく辻原元甫（〈一六二二〉～？）の『倭小学』（六巻六冊）であろう。こちらは元の『小学』を逐一訳した内容である。

規範は「聖賢の教」である儒書にとるべきだが、「変通」がなければ、我が国で実践することが困難であるとする。「文義」の範を儒書にとりつつも、我が国の風俗に合わせて改変した「わさ」を行うべきというものである。そして元珍にいわせれば、この接合がうまくなされないところに、学者と世間のズレ、すなわち学問無用論が蔓延しているというのである。

日本の近世社会における学問、なかでも儒学の位置づけについては、享受する階層と目的、また時期によっても様相が異なっていることが明らかにされている[(3)]。そうした状況のなかでの学問無用論というのは、近世を通じて存在しつづけたと考えるべきであろう[(4)]。こうした流れに対して、自覚的に向き合い対応策を練ったのが、元珍をはじめとする闇斎派の人々ではなかったかと考える。

というのも、闇斎学の儒者たちが六芸について論じたものが講義録の形でいくつも残されているのである。たとえば、浅見絅斎の『小学講義』や永井行達の『小学筆記』などである。いずれも『周礼注疏』巻十四にある六芸に沿って講釈した内容である。六芸の具体的な内容を解説したものにで、その表題からも分かるように六芸論は『小学』とともに論じられることが多い。『小学』が引く周礼の六芸を『注疏』によって詳しく説明しているともいえる。いずれにしても、初学者に向けた講義のなかで六芸の学びに焦点があわせられている。

元珍の議論に戻ろう。元珍もまた、六芸を『小学』の領域の基礎教養として位置づける。その上で『大学』に進み大業をなすためには決しておろそかにしてはならない領域とする。基礎の学び、すなわち「童輩の時より学ひ様の筋道」を得なければ、物言う「書筒」で一生を了ると厳しい。これは初学者の学びに重点を置き、講釈による画一的な学びの型と内容理解を促していくことでもある。闇斎やその直接の弟子たちの時代、師説への盲従、狭隘で紋切り型と他派の儒者たちに揶揄された道学主義を涵養する学びである。道学主義への固執、それは〝伝統的な〟闇斎学の学びともとれるが、元珍の置かれた状況からは近世前期とはことなる時代の要請があるのではないだろうか。

同時期に日向国高鍋藩の藩儒で闇斎学を奉じた千手廉斎（一七三七〜一八一九）は、ある人と師の適正について論じている[(5)]。初学の人の師には、若く卓越した秀才で

厳格な人物ではなく、老成して穏やかに諭すことのできる人物がよいという。廉斎が求めるのもまた、学問のはじめの段階で、均質的な基礎教養をしっかりと学ばせることにある。

近世社会の成熟とともに、社会への儒学受容は確実に進んでいった。しかし一方で学問に対する無用論があり、道徳や政治への言及を離れ遊芸化した儒学世界の弊害もふくめて、ひとくくりに批判する声が決して小さくはなかったのである。元珍の主張の根幹も、儒学の社会的認知の狭間で、本来の儒学の理想に立ち戻るために、学びのはじめを正していくことにある。

ところで、本書に序文を寄せるのは国学者・服部菅雄（一七七五～一八三七）である。[6] 菅雄は、遠江国引佐郡都田村（現浜松市）に生まれ、島田宿の服部家の養子になった人物である。生涯の内に江戸や名古屋、京都、信州、東北と各地を訪れ、求めに応じて国学を講じた漂泊の国学者として知られる。元珍との接点もおそらく菅雄が立ち寄った名古屋でのことと推測される。序文を寄せた経緯の詳しいことは不明だが、儒者の「漢ふり」を難じる菅雄にとって、現実社会での有用論を唱える元珍の主張は、「皇国ふり」に寄せる論として好意的に捉えられたのであろう。学問の有用論という点で学びの内容を異にする儒者と国学者が邂逅する。ここからは、社会における学問の役割を論点とする近世後期の知識人層の課題意識をくみ取ることもできよう。

【注】

（1）福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』厚生閣書店、一九三七年。

（2）具体的な学問批判は拙稿「近世武士の学問受容と社会意識　尾張藩士・平岩元珍の主体形成をめぐって」『人民の歴史学』一七八号、二〇〇八年。

（3）例えば、鈴木俊幸『江戸の読書熱　自学する読者と書籍流通』平凡社、二〇〇七年。

（4）木村政伸『近世地域教育史の研究』思文閣出版、二〇〇六年。

（5）拙稿「十八世紀後半の社倉法と政治意識　高鍋藩儒・千手廉斎の思想と行動」清水光明編『アジア遊学一八五「近世化」論と日本』勉誠出版、二〇一五年。

（6）菅雄についてのまとまった研究は、村松博司『増訂　服部菅雄伝の研究』桜楓社、一九七四年。

【翻刻】

凡例

一、翻刻に当たって底本としたのは、名古屋市立鶴舞中央図書館蔵の『𠹭囈録』(市六‐二六)である。また、参考として名古屋市立蓬左文庫蔵本と陽明文庫蔵本も参照した。

一、使用字体は常用漢字を用い、それ以外は異字・俗字・略字もなるべく原文のまま記載している。

一、翻刻の形式は、行数・字数ともに本誌にあわせて編集した。

一、虫損・破損などによって文字が判読出来ない場合は、字数を推測して□で示した。

一、翻刻者の責任によって、適宜、句読点をつけた。

無鐘伝ニ龍をとるちふ亨才も、　ぅつそみのゝ雲に乗ち
ふ妙なる　わさも、たゝ書上の真言にいひ伝へ　たるは、
海月なすぅきたゝよへること　のミおほかるゝを、此𠹭囈
ちふ録は、も　ろこしの古しへの聖のをしへを　ぅまらに
まねひ、つばらに考て　皇国の人のけのをつの実事にもち
うへき事を言あけしたるハ、作るよりも殊におむなしき
ことあけなるかも、かれおのれと翁とは、からのやまと
の学の道はことなれと、おもむけの似からひたるハいれ
紐のおやし心とおほしてうるはしき友垣となもなりにき、
なへて世の儒者ちふ受もの作りとつくる書としいへば皆
むへく漢ふりにのミ綴れるを、こは皇国ふりにこと更に
やすらけくかゝれたるも即ち、たてたるおもむきの一ふ
しにて事にしたかひてうこき有事をしめせるものならし、
こをあらはせるハ尾張の殿人平岩翁、こをはしがきした
るハ駿河の皇民

服部菅雄

文化十二年五月四日

喭囈録序

曽子病て終らんとせられし時、孟敬子問侍りしに鳥のまさに死なんとす、其なく事かなし人のまさに死なんとす、其いふ事よしと申されしハ、其言のよきをしらしめんかためなりけらし。謙辞確論ふたつなからかねたりとや申すへき。されはこそ孔門に於て顔曽とならへ称したりけめ。つゐに道統の嫡伝を天下万世に伝へたれしハ尊ふにも猶あまりある事にこそ覚ゆれ。但し是等の謙辞も曽子の地位にしてこそしかるへけれ、凡庸の士よろしき所にあらす。いはさるにはしかすと申す人もあるへけれと、愚者の一得と申事も侍れハ、もしおもふ所あらんにたゝにいはすして死せんもまた本意なきことならすや。甲戌の春きさらき末つかた、予病の牀につきぬ。其病勢甚しくして今死せんとするほとにもなけれと、もし一きは悪症出きたらんにハすへきやうなかるへし、なと諸医申しあへり。そも〳〵三四年このかた不幸にして子を先たて、妻にわかれ、いはゆる顛連無告の民に似てけり。これらのおもひつもりて此病をなせしなと申すか、又疫熱にてこそと申す医もありけれ。さもあらハあれ、身に曽子の徳なく、門にしかるへき弟子もあらされハ、そのいひ出る所のことき誰かハ得てよしあしをもわかちて後世につたへつへき。幸に気力全く尽たりといふ病にもあらされハ、薬餌のいとまこの喭囈をなし、自ら銘して自らかへりみるになんありける。今卯月なかは病漸く癒えて飲食平常に異ならす。かくてハ命全きことを得てん事疑ひなし。此上長寿かきりあらしなと賞する人々多かり、某もまたよろこひにたへす。療ふひま〳〵かのさきにしるせし所をみるに、譫言とせんか喭囈とせんか、もとより大邦の君子に示すにたる物ならねと、たゝちにかいやりすてんも流石に難助の心地すれハ、また自ら浄写して他日の遺忘に侍んとす。されと秘して蠧魚の用にあつるも無益の事なりけれは、塾中初学の徒の警戒となし、又幸いにして伝滄の士の眼にふれ、其訂正を受んハもつとも某か本懐なり。故に今一小冊となし喭囈録と名つくる事しかり。かの病中養生の方のことときハ既に成る所有て大にしるしを得たりき。是らの事のことときハ別にしるす所あり。これまた秘するにもあらす、弘むるにもあらす、唯知己の問を俟つのみ。

甲戌夏四月　　平岩元珍

【本文】

哢囈録

尾張　平岩元珍著

世の人ハ酔生夢死して生て時に養なく死て後に聞ゆる事もなければ、論するに不及、ひとり儒者の漢庵の書をよみ或は風月をめて世外の事をなし、おのれ孔子の統をつけりと人もゆるさぬ尊大の先生になり、却て風俗をそこなふハいとにくむへき事ならすや。およそ学問ハ格物致知よりして治国平天下の業にいたるまで規矩準縄ありて少しも私意をかふへからす。されハ其階級にしたかひ、今日有用の道をこそ学ふへきに、只己か好む所におち入て天下無用の物となれり。それか中少しく行はるゝも詩文とか典故すきとか其主の好事一道に用ひられて生涯の望たれりと思へるハいかなる心にか解しかたき事なり。是等ハ弓馬刀鎗を初め、碁将棋の相手となるも同し事にて儒者の本意いつこにかあらん。かゝる弊風をなせる事、今に初らされハ人も異とせす。自らもあんし、得意顔なるハ心を得ぬ事共也。たまく〱大中至正天下有用の学を心にかくる者あれハ、人これを儒とせす、たゝちに俗人とし、或ハ物にかゝりなとゝ称して用ひられす。それ孔子ハ生民ありてよりこのかたなき所の聖人なれと、これを鄙事に多能なりとし、又大哉、孔子博く学んで名をなす所なしなともそしり侍りき。甚しきにいたりてハ東家の丘なと申せし愚児もありしそかし。されハ世の人の名つくる所もまたむへなりとや申すへき。但し達すれハともに天下をよくし、窮すれハひとり其身を善するは、もとより聖賢の志にて其よくするの筋に於てたらさる所あるハ、其罪いつこにか帰せん。これを内に自らかへり見るともいひ、又君子つねにかへるのみとも申せハ、かへすく〱も研窮をすへき事にこそすれ。学者世用に立さるハ子細種々なれと、まつ幼少の時より六芸の講し方あしきよりおこれりと思ひ侍る。故に其意を述る事左のことし。

礼

礼ハ天理の節文人事の儀則とありて天然自然の筋目の丁度程よくあやとなり、すなはち人の事ののり作法となりて備り居るを申すなり。是らの事をもて聖人の物好にて作り出し給ふ様におもふハ俗儒の見也。今日人のするほとの事、飯をくふも茶をのむも皆天也。天理本然日用書行と申すハ此事にそ。是もまたかくとのみ心得ぬれハ、

いはゆる一場の話説とする物にして、有用の学とハいふへからす。有用の学ハ其事を躰認するにあり。まつ書物の上にて天理ハ自然の筋目と心得ぬれハよしと思へと、わさにかゝりてハ思ひの外事ゆかさることあり。それ洒灑応対より打立、吉凶賔軍嘉と申すも文義ハすみたれと、これをわさにして試みされハ我身の物とならす。今日のはたらき出来ましきなり。此わさを小子の時に学ひ畢り、其成功により大学以上に登らん者ハ三礼を初め吾邦の典故を吟味し、及ひ室町の天下定置れし諸礼といふもの又今の　御代の御議定までも心得されハ、今太刀の請取わたし一ツも面に墻するかことくにてあるへき。かの手習師匠の子共に教る礼を俗礼と見て心にもかけさるハ俗儒のつねなり。されハこそ口に三代の礼を申せと身に当代の礼を行ふ事あたはす。彼無用の物となれり。あさましき事ならすや。張横渠の礼を教へられしを程子ハそしられたれこそハ僻事にて、朱子の『近思録』にのせられしはこれか為の故なりけり。礼ハ郷をすとあれハ郷党の礼を講せんハ勿論の事にてある也。すへて今の事を俗也とて耳にもかけすゆるかせに思へるハいかなる心にか、学者不㆑可㆑不㆑通㆓世勢㆒といふの語、眼をつくへき事なるをいふかたき事共なり。されハ身に行ふ所当代の礼にくらからす、口に誦する処三代及ひ吾邦の古礼にあきらかにしてこそ有用の学者とハ申へけれ。

楽

楽ハ天地之和也とありてあつかる所大なり。六律八音と申事及ひ六楽といひ楽語楽舞楽徳のわけあれと、其義は周礼礼記等に詳なれハ凡書をよまんする者心得あるへけれハ、今また謷せす、担いにしへより楽律の書に志ある者甚まれにして、それか中頗る会得せりと見ゆる者のこときも楽律は楽律、声音ハ声音にしてい合一する所をしらすそ侍りし。彼礼書にあきらかにして、身其礼を行ふ事不㆑能者と其罪ひとしかるへし。是らの事のこときを某年来考ふる所ありて、あらはす所の書また十数部に及ぬ。よみてしるへし。されハ耳にきく所今行はるゝ所の鏗鏘の音を初め俗間の歌謡までにもくらからす。口に論する所和漢古今の楽理にあきらかにしてこそ有用の学者とハ申すへけれ。礼楽皆得これを有徳といひ、唯君子にして後の礼楽の原に通すといふ。本文心を潜むへき事にこそ。

射

射ハ五射と申して五つのわけあり。是また文義に於て解

しかたき事もなけれハこゝに詳にせす。それ吾　邦伝ふる所の射法のことき其淵源甚幽遠にして微妙の事もある也。某もまた一道伝ふる所ありて、秘書十数巻を写し置ぬ。されと彼業に熱せされハ、いはゆる猫に小判とやらん申す俗諺のことくこれを憂ふる事年あり。幸いに同僚にして此道に達し多くの子弟を指南する人あり。たま〳〵此事をかたりたりけれハ、其人よろこひに不堪して曰、吾亡父其書を欲する事多年なれ、こと終に不得して没しき、今其秘書を得てんにハ上ハ亡父の志をつき、下ハ我業を成にいたらん、一身の慶この事にあり、なとかたられたるにより其書を皆授け畢りぬ。某もまた此書の有用にいたらん事年来の本懐なりき。射法の事にいたりてハ一向に下りてもろこしのむかし徳行をみるへしなとゝ申すの筋をしれる者も聞えす。やゝもすれハ神道と申事を聞つたへ神代の事をいひ、又両部習合の説をうけ九の射法にて、花形を第一とし、軽き矢を以て拍子よくあ字なとを云立る輩ありと申すか、十に八九分ハ只太平後たるを主とするのみなりき。古の射法と申すものいつこにかある。それか中古法を講する人もあれと、いはゆる餼羊と存するの類にして、かの徳行を見るの射に於てハ全く得たりともおもはれす。但しこれらを捨て別に射法もあらされハ、其中に就て取捨し、これを階梯として本法の射法を興隆なしたらんにハ誠に有用の射とこそ申すへけれ。御ハ五御とありてみな車に馬をつけ車上に在て其馬をつかふの法也。吾邦乗馬の法とハ大に異也と申すか、夫吾邦中古以来治れる時ハ馬に乗て行装を正しくし、乱れる時もまたこれをもてかけ引を自在になせり。今日の用をなせるの肝要ならすや。また武門に於ても弓馬ハ道と申してことに尊へり。但しこれもまた弓道と同しく其末をのみ論して源に及ふの書なし。されハとて一向に度外にをくはかの俗儒の見なり。今の馬術の中に就て用ふへきを用ひ捨へきを捨なんにハ、なとか聖賢の道にかなハさる事のあるへき。今軍馬と申事を講する輩あれと其説いかゝあるへき。魯一変せハ道にいたらんといふの意あらんかし。ある人某を難して曰、それ彼此国遙にして風俗もとより異也、しかるを今の馬術を一洗して聖賢の道にかなハしめんとするは我きく所にあらす、こふ其説の詳なるを聞ん。曰然り、しかるに子其一を知て其二をしらすとや申すへき。そも〳〵吾邦にして彼国の道を学ふハおよそ人性受る所の理同しけれハ也。其気のこと

きハかの国すら一なるそ、ましてこの国に於てをや。五典の教上古　神聖の道にたかはす。また聖人継興りて綱領條目全く備りたれハとそ、中古以来かく行れかく尊ふ人多かめれ。其風俗のことき ハ彼ハ彼これハこれにしておのつから事かくことなし。今夫小学校をたて其教を施んに朱子小学の書のことく、一々同しからんと欲せんハ、いはゆる柱に膠して琴を鼓するの類ならん。善哉、垂加翁『大和小学』をあらはして立教明倫敬身の目ハたてられたれと、其のする所の説のこらす合りともおもはれす。今一種の大和小学ハ本書をかなに取直したるのみにして変通なし。是らをもて翁の朱学にふかき事をしるへし。同しからされハ三代以来の残編をより所として朱子考へ定められし所の小学の法にあらす。また異ならされハ我国にして用る処の小学の話法とハ申しかたし。（因に云世に一種の儒生あり。ひろく聖賢の書をよみ事に程朱の学に従ふといへとも、其志矜高にして存養の工夫なく、吾邦の人あらはす所の書といへハ是非を不問してたゝちにつたなしとす。しかふして其言行を見聞するに何一つわきまへ得たりともおもはれす。又第一家一官をもおさむる事不能、唯平生このむ所、いはゆる毛唐人のことくにして俗耳をおとろかす事のみそ多かる。是らは畢竟訓詁名利の学、もとより孔朱の罪人にして歯牙にかくるにもたらねと、又これに化せらるゝ少年も多く、或ハ武人俗吏のそしれる事もこれよりおこる事、またすくなからす。只無用の学のみにあらす、風俗をそこなふ事、さきにいはゆる風流をもて世外の事をなすの儒よりハ一統ふかゝるへし。故にやむ事を得すしてかくハ申けり。）今論する所の御のことき もまたかくのことし。今はた六芸を講せんにハこれを捨て其外やハある。すへてに学の法小児より大人に至るまて人倫の大法を教へ身のわさを熟せしむるにあり。当代にして武家の急務、弓馬ならひに刀鎗なれハ、最稽古すへき事にこそ。されと其の流派に善悪すくなからされハこれまた取捨あるへし。

書

書ハ六書をいふとありて夫々の分別あれと、此六書にあきらかにして常の書翰にも選て本字を用ひ、又やゝもすれハ唐様なとゝのゝしり通俗の書法にうとき書家いくらといふ数を不レ知。或ハ通俗のみを事として美さまたてさまのせんさくのみつよく、たま〱楷書なといふ躰をかけと、其法なく只字書をみて画のちかはぬまての書家もありけるにや。是らハ皆僻事なり。およそ書家と申したらんにハ和漢古今の躰を明にして今日の用ににたるをこそ有用の書家とハ申すへけれ。されと是もまた容易の事にあらす、性筆道にさときか、またハ其家の人ハしかるへし。只有用の学に志あらん人はむしろ古躰にハ達せすとも今様の書法に通するをしかるへしとそ覚侍る。そも〱京師に書博士と申す者ありて伝ふる所珍重かきりなき道なり。某も私かに人に淑したれと熟せされハ無益の事也。されとしらさるにハまさるへきか。ある人予に難して曰、今書博士一流の書を見るに甚奇僻にして世用に

遠く、又書論に合ふ所ありともおもはれす、しかるを子珍重する事其説いかに。曰それ筆道ハ書道の本法を伝へて古今に通達し雅俗を不レ論、ゆくとして筆道にあらさる事なきを主とす。かの躰裁のことき八其人のこのむ所にまかせり奇僻にして世用に不レ適ハ其人精熟せさるにや。又ハからふみ心になれて此方の筆道唐以来相伝ふる所の直伝なき事をしらす。我国の書とさへいへハたゝちに以て和習ありなとゝする見識よりおこれるか、それ、董其昌ハ世人一般に間然する所なき書家ならすや、子もまた奇僻也とも書論に不レ合とも思ふへからす。其珍重する所戯鴻堂法帖の中に我国の書を選ひ入て大に賞したりき。其昌は和習をいかに思ひけるにか、子か党定論あらんにハあきかまほしき事になん。

数

数ハ九数を謂とあり。吾邦今に伝ふる処も九ツにわかれたり。近来ことに委しき算者出来て高遠なる説もありと申すか、必竟異乗同余の外あるましけれハ、今日の用かけぬ程に学ひたらんこそ、願はしき事なれ。されハとて物を大概にしてふかく学ハされとにハ非す。或ハ其家又ハ其道にかしこき人ハ和漢の算書を研窮し、国家有用の数者たらんと心にかくへき事なり。但天下の人をして皆算筭をもて米のうり買を算せしむるかことき八、例の物好学問にして某か願ふ所にハあらす。すへて道は近きにあり、人の道をして人に遠き以て道とすへからすと申事のあるそかし。只口かしこく高遠なる事をのゝしりありくハ聖賢の道に合ふや、否、吾ハ信せす。此六芸の中礼楽ハ身を修るの要道、国を治るの大本なれハ小学この業のみにハかきるへからす。大学小学の工夫をかね修身無窮の大業にて侍る也。某論する所も他の例とハ異なり、眼をつけて玩索すへし。但業にして業のみにハかきらさるか故に、古今の儒者論する所高遠にはせて実用に益なし。先この六芸の節文に達し、然後大学にのほり窮理尽性の学に於て体せさる事なく、通儒全才と申す地位にもいたるへくそ。但童輩の時より学ひ様の筋道を得されハ、老年にいたるまで数万巻の書をよみ得るとも何の有用もなく、只書笥の物いふことくにそあるへき。是をもて一生を終るハあさましき事にハあらすや。とにもかくにも業より入の地盤なけれハ理業合一のはたらきハ覚束なき事也。是すなはち大学のしるを致むるは物にわたるに在と申所に連続す。心を潜て玩味すへき事にそありける。

東都小石川伝通院前

発弘所　青山堂　雁金屋清吉